

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2014 NEW YEAR



「寒修行」 毎年、1月の大寒に行われる滝打ち行。
今年は1月20日です。(大岩山日石寺・富山県上市町)

絵 田原 忠男

❖ 新年のご挨拶

大林 厚次(北陸地域づくり協会 理事長)

2

❖ 年頭のご挨拶

野田 徹(北陸地方整備局長)

3

❖ 随 想

坂下 可奈子(「ChuClu」編集長)
「1000年続く、中山間地域」

4

❖ 特別企画

北陸地方整備局 事業紹介
「あふれる自然・歴史ロマン・
未来へつなぐ八十里越」
(長岡国道事務所・新潟県三条市)

6

❖ 特集「地域とともに」

第18回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業
土木遺産を保存し、地域の資産として活用する
土木・環境しなの技術支援センター(長野県長野市)

10

❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

山に響く神岡のハーモニーはガッタンゴットン!
NPO法人神岡・町づくりネットワーク(岐阜県飛騨市)

12

❖ 北陸再発見

おもてなしの和紅茶、加賀の紅茶
(石川県金沢市・加賀市)

14

❖ 会員だより

16

❖ 伝言板

20

新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

おおばやし こうじ
大林 厚次



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様には、健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

これまでは暗いニュースが多くありましたが、昨年は久しぶりに明るい話題がいくつかありました。一つは我々の生活に直結する景気、アベノミクスに対する期待がある中で、円安、株高が進み、庶民感覚としてはまだまだ遠い存在のようではありますが、景気も徐々に回復傾向の兆しを示してきているようであります。

一昨年までの見通しの立たない暗い雰囲気から、何か一筋の明かりが差し込み期待を持たせる雰囲気に変わってきて気持ちも明るくなってきたのではないのでしょうか。

また、この景気を後押しするように、9月には待望の「2020年東京オリンピック、パラリンピック開催」の決定がされ、このときの招致活動や国民やメディアの期待の大きさ、また、決定の瞬間は国を挙げての祝賀ムード。このように日本国民が心を一つになった瞬間が今までにあったのでしょうか。この勢いで開催までの6年間、オールジャパンの体制で万全の準備を行い、2020年が記録・記憶に残る大会であってほしいものであります。

また、北陸では待ち遠しかった北陸新幹線が金沢までの平成27年春の開業に向け、12月には試験走行も始まり、各駅で住民の出迎えや式典が催され、開業に向けたムードが盛り上がっております。

一方、東日本大震災の後も、全国各地で局地的な豪雨や竜巻、突風、そして台風が頻発しており、生命・財産を脅かし、社会活動、経済活動に大きな被害を与えています。特に昨年は大

型で強い台風26号による大雨の影響で、伊豆大島で大規模な土石流災害が発生し死亡・行方不明者39人に上りました。また、海外では11月に台風30号がフィリピン中部に直撃し、高潮等に見舞われレイテ島を中心に死者・行方不明者7,000人を超えるという甚大な被害が発生しました。

今後予測される首都直下型や南海トラフ地震等の大災害や風水害に対し、安全・安心な国土を残すためにも国土強靱化基本法の整備がなされ、予算の裏付けに基づく減災・防災対策が着実に実施されることを期待するものであります。

当協会を取り巻く環境は引き続き厳しいものがありますが、これまで総会等で決議して頂いた方針に基づき手続きを進めてきました。4月には一般社団法人に移行し、組織名称を北陸地域づくり協会に改称しました。また、発注者支援業務からの計画的撤退につきましては、譲受けの新会社「(株)建設マネジメント北陸」を民間企業の協力を得て10月2日に設立し、工事監督業務を先行し12月1日に職員の協力のもと事業譲渡を行い、計画的撤退の第一歩を踏み出しました。残余の業務については平成26・27年に順次事業譲渡する予定であります。

今後の(一社)北陸地域づくり協会は新会社に業務を譲渡しつつ、その時々ニーズに応え様々な業務に取り組んでいく必要があると考えております。(株)建設マネジメント北陸は当面、協会から引き継いだ業務を着実に実施することに全勢力を費やすこととなります。

引き続き会員の皆様のご指導、ご鞭撻をお願いし新年のご挨拶とさせていただきます。

年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

の だ とおる
野田 徹



平成 26 年の新しい年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人北陸地域づくり協会の会員の皆様方には、平素より北陸地方における国土交通行政の推進にご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

新たな年においても引き続きご支援ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

さて、昨年から国土交通省では平成 24 年度の補正予算に加え、25 年度の当初予算を 15 ヶ月予算として「復興・防災対策」、「成長による富の創出」及び「暮らしの安心・地域活性化」の 3 分野を重点化し取り組んでいます。

北陸地方整備局所管事業におきましても、日本海沿岸東北自動車道の朝日～温海間の新規事業着手、能越自動車道七尾氷見道路の七尾城山～七尾大泊間の供用開始、伏木富山港新湊地区臨港道路（新湊大橋）の全面供用開始、下新川海岸平成 20 年高波災害対策事業の概成、信濃川大河津分水可動堰の概成など地域経済の活性化や地域の安全・安心の確保に向けて大きな進展がありました。

引き続き北陸地方において、防災力の強化などを含めまして、強力に河川、道路、港湾などの整備を着実に進めて参りますので、皆様方のご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

北陸地域づくり協会におかれましては、一般社団法人への移行に合わせて昨年 4 月に名称変更され再出発されました。北陸地方建設局及び北陸地方整備局とともに半世紀近くにわたり建設事業の円滑な推進を図り、国土の健全な発展に寄与されたことに感謝申し上げますとともに深く敬意を表します。今後とも北陸地方における社会資本の整備と管理を行うに当たり、大所高所からのご支援をお願いいたします。

結びに会員の皆様におかれましては、引き続き北陸地方整備局に対して一層のご支援・ご助言を重ねてお願いいたしますとともに、会員の皆様が本年もご健勝で活躍されますことを祈念申し上げ、年頭のご挨拶といたします。



大河津分水全景（平成 25 年 10 月 23 撮影）

1000年続く、中山間地域



さかした かなこ
坂下 可奈子

「ChuClu (ちゅくる)」編集長

1987年香川県高松市生まれ。26歳。立教大学法学部政治学科卒業。学生時代に農作業ボランティアに参加し、以来集落に通い続け、卒業後十日町市の池谷集落に移住。米、野菜の生産、出荷、販売に従事。2013年、「移住女子」の視点で、中山間地を発信する冊子「ChuClu」を企画・編集。

政治学を学ぶ夢みる夢子ちゃん

雪の音に分かるようだ。雪は音もなく窓の外を流れていくが、それを見なくても、静まり返った夜の肌触りから、降雪を察知するらしい。「おらたちがどうしたって雪は止まないんだから。そんなときは、ああどンドン降りて思えばいい」そう言うおじいちゃんがいた。



中山間地は未来に向かって進む希望集落

私が住むのは、新潟県十日町市の中山間地である、池谷集落だ。現在8軒19人の集落。私は2011年の2月、大学を卒業した23歳のときに移住した。現在は集落の人から田畑を借りて、直接販売をしているお米や野菜の生産、出荷、販売と、地域の仕事に携わっている。

出身は香川県高松市。その頃は、田舎への劣等感から、東京に出たくてたまらなかった。しかし家族は「女の子なんだし、大学じゃなくて地元の専門学校でいいじゃない」と言う。「私にも夢はあって、やりたいこともあって、世の中は女性だって立派に働いている！」そんな反抗心もあったかもしれない。

結果、勝手に願書を出し、受験、合格、ポンと東京に出た。東京にいた頃は最高だった。新

しい情報があり、出来事があり、いつも最先端がそばにあった。香川で会うことはないだろうすごい人たち、刺激的な人たちにも出会った。バイトをしては、やりたいことにつき込んだ。

そんな私も当時は、どうやったら世の中は平和になるのだろうか、どうやったら戦争はなくなるのだろうかと考える夢みる夢子ちゃんだった。

だから将来は、海外での人道支援活動や報道の仕事に就きたかった。ケニアやルワンダにも足を運んだ。大学でも政治学科で紛争解決という難しそうなテーマを難しそうな顔をして、ああだこうだと勉強していた。

池谷集落との出会いと感動、そして移住

そのうちに、全ての紛争の問題は人の心から生まれるのだと気付くようになった。あいつが嫌いだ、あれがほしい…など、欲が出たり、妬みが出たり。

そう気付いてからは、現地で働いたとしても、絆創膏的なことしかできず、根本的な問題の解決にはならないと思えた。そんなときに池谷集落に出会った。在学中、国際支援に取り組むNPO法人JENという存在を知り、そこが中越地震以降、池谷集落にて支援活動をしていた。当時は6軒13人。もう地震から5年ほど経っており、支援のかたちは復興支援から、過疎地を元気にするための地域おこし活動へと変容していた。

初めての道普請参加から移住までの展開はうまく言葉にできない。村の人たちの人間性、人と作物にまっすぐ向かう姿、世の中がどうなろうともぶれない強い生き方、そしてずっとずっと守ってきたものたち。集落の人たちは、たくさんのことを教えてくれた。

いま、山地は淘汰され、人が離れて行く地域ではあるが、私はそこからたくさんの感動と、たくさんの価値観の変化を受けた。そんな場所がなくなってほしくない、どうにかバトンをちゃんと繋げたい。なにより、こんな大人になりたいという人たちがいる。その思いで卒業後、移住した。



地域のおじいちゃんは農業、人生哲学の先生

「ChuClu」で中山間地の今を発信

友達も同級生もいない場所での単身生活はときに寂しかった。けれど、集落の人たち、そして移住してから見えてきた、近隣に住むたくさんの方たち、みんなが家族のようだった。年を経るごとに、この場所が好きになっていった。

学生時代に、池谷集落に通う中で感じたこと、「ここは限界集落と言われているけれども、ちっとも限界ではない。彼らは未来に向かっていて、希望集落なのだ」と確信した気持ちは今も変わらない。もちろん住んでから気付く、たくさんの難しい問題もある。しかし、船をこぐ限り、地域は希望に溢れている。

移住3年目にして、移住者同士のつながりもできた。その中で、中越防災安全推進機構が実施する中越へのインターン事業「イナカレッジ」の中で出会った仲間から、「移住女子」たちの視点で、中越を発信する冊子を作らないかという話が出た。しかし、話し合いを重ねていくうちに、「中越の魅力発信」から、「中山間地の発信」へと変化した。私たちは皆、気付けば中山間地域に住み、仕事は違うが、そこを守っていきたい気持ちは同じだった。

その冊子は、インターネット上で思いを発信

し寄付を募り、結果105万円の寄付が集まった。年4回の発刊とし、2013年8月に第1号を発刊することができた。その冊子は、「中山間地域に人が来る」また「山地はものが作られ、うまれる現場である」ことから、「ChuClu(ちゅくる)」と名付けられた。



中山間地域の素晴らしさが伝わる「移住女子」4人の笑顔
左から、渡辺さん、笠原さん、坂下さん、五味さん

次代にしあわせのバトンを繋ぐ

過疎の進む中山間地域はもはや、そこに住んでいる人だけではどうにもならない。いまや、そこを出た人、周辺に住んでいる人、または移住までいかずともその地域を愛する都心の人たちも皆、「村人」となって見守っていかなければならない。それぞれの距離からバトンを繋ぐのだ。

そのためには、人と人を繋げるためのパイプが必要だ。

集落の人が言ったことばがずっと頭に残っている。「仕事はもらうもんじゃない。仕事はないんじゃないで、作るもんなんだ」。

この2月で、移住して丸3年になる。田んぼも少しずつ増えてきた。ここから発信し、人をしあわせにできる山地を作り、そしてしあわせなおばあちゃんになって、ちゃんとバトンを次に繋げたい。



「ChuClu」夏号・秋号は
移住女子のWEBサイト

iターン留学

にいがたイナカレッジ

<http://inacollege.jp/jju-joshi/>
からご覧いただけます。

あふれる自然・歴史ロマン・未来へつなぐ八十里越

北陸地方整備局 長岡国道事務所・新潟県三条市

1. はじめに

一般国道 289 号は新潟県新潟市を起点とし福島県いわき市に至る約 304.5km の道路である。そのうち唯一の通行不能区間が「八十里越」となっている。

2. 八十里越の歴史

「八十里越」の由来は諸説あるが、実際は八里ほどであるが、一里が十里に思えるほど困難な山道だったからだと言われている。

八十里越の歴史は古く戦国時代終わり頃から江戸初期に峠の道として開かれたと言われている。かつては、南会津地域と越後を結び、越後からは塩・魚・鉄製品などの生活用品、南会津地域からは蚕や林産物、労働力など人的交流・物流を担う大切な道路として使用されていた。明治時代には、年 18,000 人の往来があったという記録が残っている。その後、大正 3 年に、岩越線（現磐越西線）が全通し、物流の主流が鉄道に移り、また度重なる災害に見舞われ、八十里越は衰退していった。

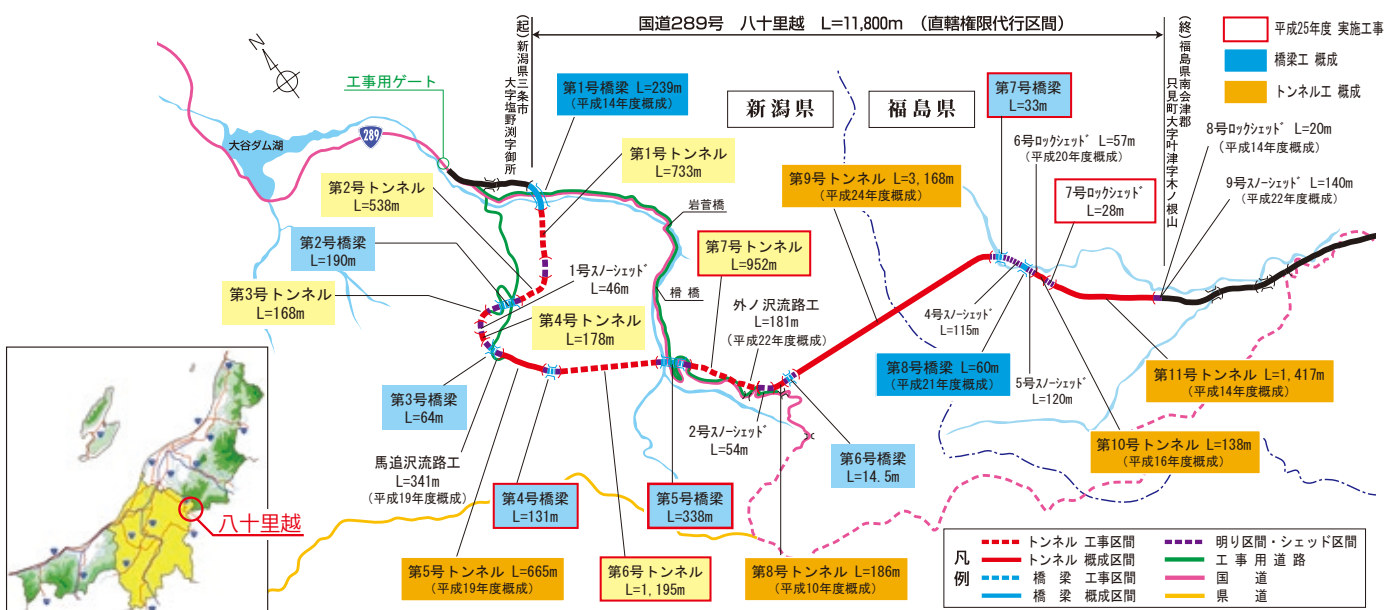
「八十里こしぬけ武士の越す峠」

八十里越の歴史の中で有名なのは、北越戊辰戦争である。慶応 4 年北越戊辰戦争において、官軍との戦いに敗れ、足を負傷した長岡藩軍事総督河井継之助が担架に乗せられ、長岡藩士家族 5,000 人とともに峠を越えた。その時に詠んだ句が「八十里こしぬけ武士の越す峠」である。河井継之助はこの傷がもとで、現福島県南会津郡只見町で 42 歳の生涯を終えている。

3. 新しい時代を結ぶ八十里越

現在、新潟県三条市と福島県南会津郡只見町を結ぶ道路は、北陸道、磐越道から国道 252 号に入るルートと国道 289 号、290 号から国道 252 号通称六十里越のルートである。磐越道まわりだと 3 時間 14 分かかり、六十里越を通ると 2 時間 16 分かかる。六十里越は、急カーブ急勾配の道路でかつ雨量規制がかかっており、冬季は通行止めになっている。新しい八十里越が完成すると 1 時間 17 分で結び、冬季も安全に通行できるようになる。

八十里越の開通は、新潟県県央地域と福島県南会津地域の経済活動、観光開発など両地域の



活性化の起爆剤として期待されている。

現在、只見町には総合病院はなく、緊急医療の搬送先として、南会津町(所要時間47分)や高度医療になると会津若松市(所要時間78分)まで搬送されている。八十里越が開通すると高度医療が受けられる三条市の病院(所要時間46分)へ搬送することが可能になり、救命救急体制の向上が期待される。

4. 事業の概要

八十里越事業は、昭和61年度に直轄権限代行で事業着手した。新潟県(L=1.2km)、国土交通省(L=11.8km)、福島県(L=7.8km)の3機関で施工している。

国土交通省は、急峻で地形的に厳しい場所を施工しており、全区間のうちトンネルは11本、橋が8橋でこのような構造物の比率が88%を占めている。

この地域は、冬季約5～7mの積雪があり、雪崩も多く工事の安全が確保できないため、12月から5月上旬まで工事が中止となってしまう。

また、豊かな自然に恵まれた地域であるため、工事にあたっては、自然環境への影響を把握し、必要に応じて適切な保全対策を講じる必要がある。このため、平成9年4月から「八十里越道路環境検討委員会」を設立し、学識経験者の指導・助言を得ながら、慎重に工事を進めている。

現在、国道289号は新潟県三条市大字塩野淵から福島県南会津郡只見町大字叶津までの間は、落石、地すべり等の危険性があるため一般車両は通行禁止となっている。この道路は工事用道路として使用し、工事関係者のみ通行が認められている。工事用道路として使用する前は、線形も悪く軽トラックがやっと通れる程度の道路であったが、山の一部を切土、谷側に擁壁をつくり道路を拡幅して工事の専用道路として現在は使用している。

5. 秘境八十里越体感バス

(1) 体感バスの概要

平成25年度より、三条市が主催する現場見学会と観光をセットにした「秘境八十里越体感

バス～感じよう、あふれる自然・歴史ロマン・未来へつなぐ土木技術～」(以下体感バス)がスタートした。



八十里越の状況、道路工事の現場、事業の効果・必要性等を確認し、事業の理解と協力を得るために長岡国道事務所が協力し工事見学を実施している。

6月30日から11月9日までの毎週平日(火曜日)、休日(土又は日曜日)の2日間、全32回(悪天候による中止6回)を実施し、1,351名の見学者を迎えた。

6月5日より体感バスの募集を開始し、7月には予定している全日程が満席となった。予想を超える反響で、キャンセル待ちが300人に達した。そこで増員、増便3回設けたが、全日程を終えキャンセル待ちが110人という結果であった。



新潟側ゲート

(2) 体感バスのルート

体感バスの始まりは、道の駅「漢学の里しただ」である。ここは、国道289号沿い景勝八木ヶ鼻近くにあり、大漢和辞典の編集者で

ある諸橋轍次博士の生家・記念館や農家レストラン庭月庵悟空・農産物直売所彩遊記とともに文化と食の里として親しまれている。

漢学の里しただを出発し、国道 289 号の通行止め区間の新潟側ゲートまで行く。ここからは、ヘルメットをかぶり、秘境八十里越の始まりである。少し走ると正面に新しい道路に続く道がある。そこから工事用道路に入り、バスはどんどん狭い山道を進んでいく。時折、待避所でダンプトラックやコンクリートミキサー車とすれ違う。バスの中では、市民ガイドと三条市の職員が説明をしてくれる。

1号橋梁が見える。1号橋梁の先は、1号トンネルに続くが、まだ工事は着手されていないので山に橋が突き刺さっているように見える。その後、岩菅橋を通り、工事用道路に唯一ある工事用信号がある区間に入る。信号は、道幅が狭く到底すれ違いができないために設置されている。道路の下は断崖絶壁となっていて、ひやっとするが景色は絶景である。

楢橋でバスを降りる。春には新緑、秋には紅葉が鮮やかな景勝地である。



楢橋からの風景（秋）

また、バスに乗り、右側に青い仮橋を見ながら、つづら折りとなっている道路を上っていく。

この青い仮橋は、5号橋梁の橋脚を施工するための橋である。5号橋梁が架かる予定の場所でバスを降りる。長岡国道事務所の職員が説明をする。6号トンネルと7号トンネルを結び、八十里越の中で一番長い橋がこの5号橋梁である。橋長が338m、4径間連続鋼細幅箱桁である。橋脚の高さが高いもので83mにもなり、下に流

れる大谷川より100mほどの高さに橋が架かる。また、対岸の山には、昔の八十里越が見える。ここで歴史についても説明される。



5号橋梁架設予定現場

バスに乗り、8号トンネルの坑口まで行く。そこで八十里越事業の説明と現在掘削中である7号トンネルの施工方法を説明する。実際どのようにトンネルを掘削しているのか、岩質はどのような岩質なのかなどわかりやすく施工業者が説明をする。



7号トンネル工事状況

その後、いよいよ新潟県と福島県の県境越えである。県境は9号トンネルの中にある。9号トンネルは、延長3,168m。八十里越の中で一番長いトンネルである。平成12年から工事を開始し、完成したのが平成24年と12年間の歳月がかかっている。なぜそんなにかかるのかというとやはり冬期間は施工できず、工事できる期間が半年間しかないというのが大きな理由である。

新潟県側から1,702m、福島県側から1,466mのところ県境がある。トンネルを抜けると福島県の風景が広がる。トンネルを抜けてすぐの

ところに7号橋梁の架設現場だ。ここが、一番標高が高く650mほどである。ここから只見町の中心に向けて、ゆるやかに下っていく。谷底を走るような道路になるため、ロックシェッドや、スノーシェッドが続く。7号橋梁は、平成23年新潟福島豪雨で下部工施工中に被災してしまった。今後は、崩れた斜面对策を平行して行いながら工事を進めていく。

ここで秘境八十里越は終わりとなり帰路につく。新潟側ゲートを抜けて大谷ダムふれあい資料館に寄り、体感バスは終了となる。

(3) アンケート結果

三条市では、見学者にアンケートを実施している。見学者の住まいは、三条市内が50%、その他県内の三条市外が49%、県外が1%。性別は女性46%、男性53%となっている。年齢は70代39%、60代37%であり高齢者が多い。

体感バスを通じて、現場見学を通じて事業の理解度をお聞きしているが、98%の方が理解で

きたと回答。また、97%の方が福島への近さを実感できたと回答しており、見学者の多くから事業の理解と整備効果を実感していただけたものと考えられる。

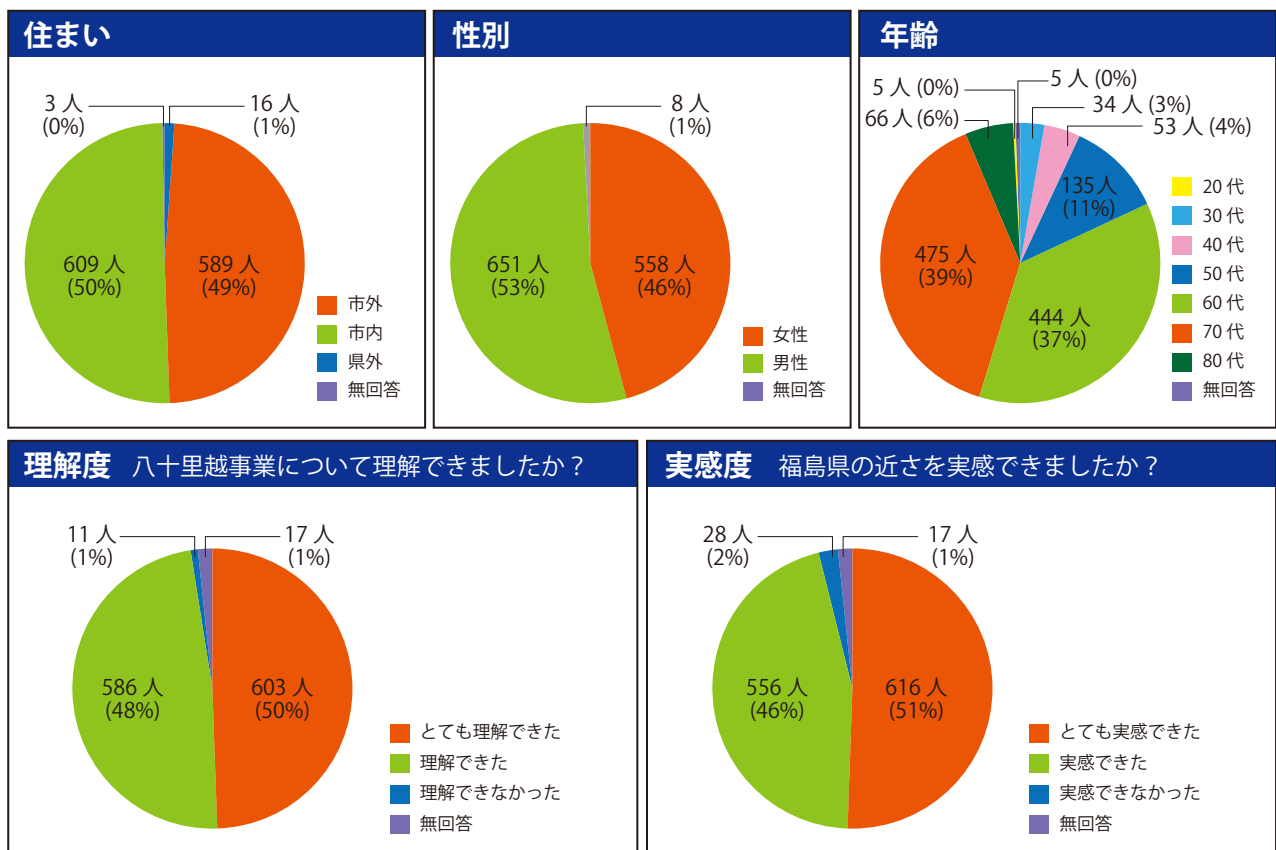
6. おわりに

昭和61年度に事業化され、平成元年に工事着手してから早25年の月日が経過している。

閉ざされたゲートの山奥で、工事は着々と進められてきたが、一般の方には、目につかなかったかもしれない。三条市の体感バスが始まり、個人でも参加できるようになり、より八十里越が身近に感じていただけたようだ。メディアにも多数紹介され、八十里越事業だけでなく、歴史街道としても八十里越は注目された。

これからも長岡国道事務所は、関係各位のご理解とご協力をいただきながら、新潟県と福島県を結ぶ新しい八十里越の事業を進めて参ります。

アンケート結果



特集「地域とともに」

第18回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

「土木遺産を保存し、地域の資産として活用する」

■ 1歳を迎えたセンターの活動

平成24年10月、土木・環境しなの技術支援センター（以下「センター」という）が設立された。設立に参加したのは、信州大学、長野高専の研究者、民間建設会社やコンサルタント会社の技術者、官庁の現役、退職技術者である。

会員は、県内の災害、地盤などの仕事、学会活動などに取り組んできたメンバーが中核である。土木の仕事は、発注者と受注、建設会社と設計コンサルと各分野の線引きが進み、以前のように分野をこえた交流が少なくなった。大学、高専の研究者との交流も同様である。自らの仕事や研究をもちながらも、共通の目標にそって活動を目指している。

これまでに企業や団体の研修への講師派遣を開始しているが、今回は、北陸地域づくり協会の研究助成事業で始めた活動を紹介したい。

■ 土木遺産保存活用事業

助成課題は「土木遺産の保存活用」というテーマである。「土木遺産」といえば、単に古い施設を懐かしくみるととられがちであるが、土木遺産は実は奥深いのである。実物を、実際に自分たちの目で確認し、その姿を調べてみるとよくわかる。その舞台（調査現場）の一つとしたのが、松本市の牛伏川^{うしぶせがわ}である。牛伏寺の山を流

れ下る川であるからで地元では「ごふくじがわ」ともよぶ。

牛伏川の砂防は明治20年前後に始まる。内務省は信濃川上流、長野県内各地で砂防工事（「石積み堰堤」など）を行う。水源地砂防である。県内では、薬師沢、荏沢川などの石積み堰堤等が現存し、国登録有形文化財となっている。

これらの砂防工事は、明治30年の砂防法制定を契機に、県営補助砂防工事として再開される。それが牛伏川砂防工事である。工事は大正7年まで続き、堰堤工、山腹工、張石水路、積苗工などが総工費22万8000余円で施工され、これらの施設はほぼ現存する。その砂防工事の最後に完了したのが、重要文化財「牛伏川階段工」である。

その技術は、内務省技師、池田圓男^{いけだまるお}がフランスのサニエル溪谷の工法を参考に指導したが、単に模倣したのではなく、池田圓男の技術者としての熱意と、現場における高い施工技術との結合が産んだ優れた技術成果である。

それは、牛伏川砂防の全体を調べることによって明らかにできるとの目標を掲げ、地元で整備活動をすすめている「牛伏鉢伏友の会」などと共同調査に取り組んでいる。山や沢を歩き、当時の施設の形状や特長を調べている。



メンバーは信州大学、長野高専の研究者、民間会社の技術者、官庁現役・退職技術者



牛伏川堰堤調査



牛伏川3D測量

■ 防災遺産学習講座と測量授業で連携

牛伏川には多くの人々、団体が見学に訪れる。特に階段工が重要文化財となって以来、休日も含めその数は増加している。県の管理範囲であるが、歴史的、技術的な価値をより多くの人に伝えるには、その説明ができる人材が必要である。そこで、「牛伏鉢伏友の会」が進める市民を対象にした「インストラクター養成のための防災遺産学習講座」に協力している。秋には、講座参加者から見学を案内できる市民が誕生した。



防災遺産学習講座で学んだ市民が牛伏川を案内

また、国立長野高専、長野県測量設計業協会と共同し、長野高等専門学校^{（注）}の学生を対象にした測量授業に取り組んだ。重要文化財牛伏川階段工を8班にわけて平板測量を行った。最初は戸惑っていた学生たちも、測量会社の技術者たちの指導により、成果を上げることができた。



長野高専の学生を対象にした測量授業

■ 土木遺産^{さかえばし}栄橋を後世に伝える

長野県で土木学会選奨土木遺産にはじめて認定されたのが、千曲川の昭和橋（坂城町）など5橋の鉄筋コンクリートローゼ桁橋である。

この橋は、昭和8年長野県に大学卒業後、赴任した若き技師中島武（後に建設省関東地方建設局長）の発案、設計による。鉄材が不足する戦争前の時代により支間の長い橋を目指し、世界初の形式に取り組んだ。建設から80年近くになり、傷みが見え始めた。そこで長野県建設部などは、補修工事に取り組むが、事例としてあげるのが佐久穂町の栄橋である。

栄橋は、中島武のコンクリートローゼ桁で最大の45m支間を有し、両側に張出した構造を持つ。アーチ桁の曲線、桁にはくぼみがあり、細工に富んだデザインである。今回の補修工事では、発注者の佐久建設事務所、施工者とセンターで協議を重ね、出来るだけ当初の姿に近づけることをも目指し、県下最大級の親柱の補修、照明灯の復元などにも取り組んだ。



栄橋（左岸から正面）

この橋がこの地域に架けられた理由や地域と共に歩んだ社会基盤を考える機会として12月3日「土木遺産栄橋講演会」を開催、地元地域の皆さんが多く参加され、栄橋の歴史的、技術的な価値を考える機会となった。

今回の事業では、平成26年1月17日に長野県立歴史館で「土木遺産保存活用シンポジウムー土木遺産を地域資産に」を開催する。土木遺産を保存するにとどまらず、地域の資産として活用する、また地域の基盤形成を担う土木建設事業への理解をさらに高める活動に取り組んでいきたい。

「土木・環境しなの技術支援センター」事務局

長野県長野市篠ノ井布施五明 341-7

TEL:026-292-4382

ホームページ

<http://www.ne.jp/asahi/tac/shinano/>

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

山に響く神岡のハーモニーはガッタンゴットン！ NPO 法人神岡・町づくりネットワーク



地元信用組合の援助を受け
つくられた最新車両に乗る田口さん

平成19年春、廃線となった旧神岡鉄道のレールにマウンテンバイク2台を固定し走らせる「レールマウンテンバイク」が登場した。

新感覚の乗り物は、世代を問わず、家族で自然と一体になり楽しめる人気を集めている。運行開始から7年目となる平成25年度は、飛騨市神岡町の人口の約3倍、26,249人の利用者が訪れた。

レールマウンテンバイクの運行管理を行っているNPO法人神岡・町づくりネットワークの事務局、田口由加子さん(35)からお話を伺った。

■ 「鉱山の町」を支えた神岡鉄道の廃線

飛騨市神岡町は、岐阜県の最北端に位置し、飛騨山脈とその支脈に囲まれ、市街地を南北に高原川が流れる自然豊かな町である。江戸時代末期には幕府直轄の鉱山として開発が始められ、明治7年からは三井金属鉱業(株)*1が鉱山経営に着手し、平成13年まで採掘が行われてきた「鉱山の町」である。

昭和40年代には、鉛・亜鉛の産出量が東洋一といわれ、神岡鉱山の企業城下町として発展し、昭和41年には国鉄神岡線が開通、町は活気に満ちていた。

しかし、鉱石の枯渇や鉱山事業の合理化により過疎化が進み、昭和59年、神岡線は第三セクター、神岡鉄道に移行したが、営業収益の8割を占めた神岡鉱山からの貨物輸送がトラック輸送へと切り替えられ、平成17年8月、廃止が決定し、平成18年12月1日に廃線となった。

*1 昭和61年から子会社の神岡鉱業(株)が経営

■ 神岡のルーツ、町のシンボルを残そう

「住民は鉱山の発展とともに暮らしてきたので、恵まれた生活環境は当たり前、観光や交流人口の増加による地域活性化といった概念にほとんど関心がなかった。

平成16年2月に神岡町、古川町、河合村、宮川村の2町2村が合併して飛騨市が誕生し、初めて自分たちの町について真剣に考えるようになった。町のルーツは何か、廃線後の町を活性化するにはどうしたらいいのか、それぞれが持つアイデアを集結する会が度々持たれ住民の意識が少しずつ変わってきていた」と田口さんは、当時を振り返る。

その中で「神岡鉄道協力会」のメンバーから、「神岡鉄道は鉱山の町のシンボル・地域のルーツ」である。町のルーツである鉄道遺産を保存・活用し、子どもたちの世代に語り継ぐために、自分たちの手で新しい乗り物をつくり、廃線になったレールの上を走らせようという熱い想いが語られた。廃線までに何とか実現させようと飛騨市観光協会も加わり、営業に向け動き出すことになった。

■ 神岡の技術でつくられている車両

基本となる「レールマウンテンバイク」の車両は、オリジナルのガイドローラー付きメタルフレームに、2台のマウンテンバイクを固定し、後輪タイヤが直接レールの上に接地し、ペダルをこぐと前進する。考案したのは、地元の木工所の社長さんで、現在、NPO法人神岡・町づく

観覧シート



ダンデム



小さい子どもやお年寄りもいっしょに乗られるようハイブリッド車の真ん中に補助シートを設置した「観覧シート」、家族4人で運転できる「ダンデム」など、利用客のニーズを反映し、次々と新しい車両が誕生している。

りネットワーク専務理事、山口正一さん。「鉾山の町」で培われてきた鉄工技術を活かしてつくりたいと、毎日、地元の鉄工所に通い、試行錯誤の末、完成させた。

安全で楽しい乗り物にしようと田口さんは何度も命がけて試乗し、利用者の視点で製作にかかわってきた。「こんなにきつくて体力が必要な車両では誰も乗ろうと思いません」という感想から、現在運行されている「ノーマル車」に電動アシストの機能をつけた「ハイブリッド車」が開発され基本車両とすることになった。

ペダルをこいで走ると、レールの継ぎ目では、町のルーツである鉄道の「ガッタンゴットン」という音と振動を感じられる。「Gattan Go! (ガッタンゴー)」と命名し運行を開始した。

■ 利用客は急増中

「運行当初から新しい体験型アクティビティだと、テレビや新聞、雑誌、インターネットで紹介され、利用客からも家族みんなで楽しめる」と評判は上々です」とマスコミ効果で広報費をあまりかけずに、あらゆる年齢層、グループを全国から呼び込んでいる。

利用客の確実な増加が見込まれることから、平成23年6月に運営を現在のNPOに移管し、平成24年度から4月上旬～11月下旬までの水曜日を除く毎日営業することになった。

年間利用客は2万人を超え、その6割以上が近隣の奥飛騨温泉郷や飛騨高山に宿泊し、お昼は神岡町内の飲食店を利用するという経済波及効果が生まれている。

「愛知県、岐阜県南部、富山県から来られる方が多いのですが、昇龍道プロジェクト^{*2}がスタートし、今年度は台湾から127人も来られました」と今後、海外からの利用客も見込まれるそうだ。

^{*2} 中部北陸9県（愛知、岐阜、三重、静岡、長野、石川、福井、富山、滋賀）が官民一体となって外国人観光客誘致を促進するプロジェクト

■ 運転区間を延長し神岡の美しさを伝えたい

現在運行されているコースは、廃止された旧神岡鉄道の「奥飛騨温泉口」から「神岡鉾山前」

までの2.9kmを往復するコースで、行きは下り、帰りは上り、所要時間はおよそ1時間。途中で抜ける2本のトンネルの中は真っ暗でスリル満点、高架からは神岡の町が一望できる。沿線は春は桜、初夏はマーガレット、秋は紅葉で彩られ、渡る風は季節を伝えてくれる。

現行区間は、旧神岡鉄道全線19.9kmのほんの一部の「まちなかコース」。もっと手つかずの壮大な溪谷美、迫力あふれる川の風景が望める「溪谷コース」を見てもらおうと、現在、飛騨市が現地調査を進めている。

これまで、ガッタンゴーの運営を遠巻きにして眺めている町民も多かったが、町が観光客で賑わっているようすを見て、「何でもっといい場所を見せてやらんね」と声をかけられることもある。

お天気が良い日には町内のディサービスに通うおじいちゃん、おばあちゃんがなつかしいレールの音を聞きにガッタンゴーを見学に来られるようになった。



ガッタンゴーは町のシンボルとして親しまれるようになっている。

開業以来、利用客の命を預かる責任を持ち、最上のサービスを提供する使命を持って運営にあたり、地域の活性化に貢献してきた取り組みが認められ、「平成24年度日本鉄道賞特別賞」、スポーツ振興賞の「スポーツとまちづくり奨励賞」を受賞している。

「数年前まで山間の過疎の町だったのが信じられない」と言う田口さんの一番の苦労は「前例がないこと」。

地域の期待を背に、一日も早い区間延長、全線運行を目指し、模索する日が続きそうだ。

取材協力：NPO 法人神岡・町づくりネットワーク
レールマウンテンバイク事務局

岐阜県飛騨市神岡町東雲 1327-2

TEL:090-7020-5852 (水曜定休)

ホームページ <http://rail-mtb.com/>

おもてなしの和紅茶、加賀の紅茶



400年の歴史を持つ加賀のお茶から和紅茶が誕生した。
急須に紅茶を入れ、お湯を注ぐと、ほのかに甘い香りとともに
華やかな味わいがゆっくりと口に広がる。

■日本茶の消費量は減少傾向

石川県は、NHKのテレビ番組「ためしてガッテン」でも紹介された「ほうじ茶王国」。緑茶を焙じた「ほうじ棒茶」が、広く家庭で飲まれている。

石川県の茶栽培の歴史は古く、加賀藩三代藩主・前田利常の製茶奨励政策まで遡る。領内の産業開発の1つとして力が注がれ、加賀市打越地区では京都宇治に匹敵する高級茶葉を栽培し、海外に輸出するまでになった。

棒茶が飲まれるようになったのは、明治時代後半で、二番茶の茎を焙じ、手頃な価格で商品化されたのがきっかけと言われている。以後、庶民のお茶として親しまれている。

しかし、日本茶の消費量は、高度経済成長とともに増加してきたが、昭和51年をピークに生活様式の変化や食生活の多様化などにより減少傾向にある。

また、家で飲む茶葉は街のお茶屋さんではなくスーパーで購入し、外出先では缶やペットボトルのお茶を飲むなど変化している。

■和紅茶「加賀の紅茶」の誕生

このようなお茶を取り巻く環境の変化に対応しようと、日本茶専門店の店主で構成される石川県茶商工業協同組合と石川県内最大の茶の産地、加賀市打越町の打越製茶農業協同組合の有

志が集まる「茶レンジの会」でお茶の販売活性化策を話し合うことになった。

茶レンジの会事務局、小林一茂さんによると「緑茶は味や香りを重んじるため、一番茶のみが使われ、その後芽が伸びても摘むだけで使われていなかった。この二番茶、三番茶を使い何かできないかと模索する中で、茶葉を発酵させてつくる紅茶に適していることが分かった」そう。

そこで石川県中小企業団体中央会から「紅茶開発」の支援を得て、「和紅茶」として製品化し、消費者に石川県で紅茶が生産されていることを知ってもらい、街のお茶専門店の存在感を高めようということになった。

2009（平成21）年秋、緑茶用の品種、ヤブキタ・オクヒカリから約40キログラム摘み取り、初めて「加賀の紅茶」として販売した。



「加賀の紅茶」の宣伝活動に忙しい茶レンジの会事務局、小林一茂さん

国産の紅茶づくりは全国の茶の産地を中心に動き始めているが、茶生産者が起業したものがほとんどで、「加賀の紅茶」のように、お茶専門店の主導で開発されたのは、全国初のケースだという。

毎年、販売されるとすぐに完売する人気で、生産量も、500 キログラムまで伸びてきている。

去年は、1 番茶を使った「初夏の紅茶」と 2 番茶・3 番茶を使った「秋の紅茶」をつくり商品群の拡充を図った。

■ 紅茶とお菓子のコラボを展開

緑茶用の茶葉でつくられる加賀の紅茶は、米飴のような甘い香りがする。また茶葉に含まれるタンニンが少ないため「渋み」が少なく、自然の甘味で、砂糖を入れずにストレートで楽しめる。後味はすっきりとし、洋菓子、和菓子の両方に合う。



「加賀の紅茶」に合うスイーツの開発



金澤百万石ブリュレ『加賀の紅茶』

茶レンジの会は、加賀の紅茶の特徴をうまく引き出すおいしい入れ方の「秘訣」を研究し、日本茶用の急須を活用する方法を考案しおいしい和紅茶の浸透に努めている。茶葉の他により手軽に味わってもらえるようティーバッグの販売も始めた。

紅茶に興味を持ってもらおうと県茶商工業協同組合加盟店で販売するほか、庭園や美術品を鑑賞した後、紅茶を楽しめるようアンテナショップを金沢市、加賀市、七尾市に展開している。

紅茶に合うスイーツの開発も進められ、毎年、紅茶のできあがりにあわせ発表されている。去年は、ブリュレの生地に加賀の紅茶をたっぷり混ぜ込んだ「金澤百万石ブリュレ『加賀の紅茶』」を販売した。



加賀の紅茶
ほろ酔いプレート

豆乳プリンと紅茶のゼリー
紅茶アイス
紅茶リキュール
(金沢 21 世紀美術館・
カフェレストラン“Fusion21”)

加賀の紅茶の茶葉と石川県産の純米酒を使ったりリキュールといった派生商品も生まれ、地域ブランドとして育っている。

■ 北陸新幹線の開通を睨み増産

打越製茶農業協同組合は、これまで「加賀の紅茶」専用加工ラインがないため、紅茶に使用する葉は刈り取ると、その日のうちに保冷トラックで静岡県内に借りている施設まで運んでいた。また葉に含まれる水分で荷台が蒸れやすく、2 時間おきに車を止めて葉をかき混ぜる作業が必要となるなど、手間がかかり運搬できる量も限られ、増産のネックになっていた。このため、加賀市内の工場に加工ラインを整備し、平成 26 年から栽培から加工まで、紅茶のラインの全てを地元で置き生産量を増やすことになった。将来的には 2 倍増を目指している。



今年は紅茶専用加工ラインが整備され増産が見込まれる

いよいよ来春、石川県待望の北陸新幹線が開通する。伝統ある加賀茶に「加賀の紅茶」が仲間入りした石川での滞在は、これまで以上に豊かな時間をもたらしてくれるだろう。

取材協力：茶レンジの会事務局

小林屋茶舗
金沢市幸町 30-1
TEL・FAX:076-231-4919



加賀友禅をモチーフにした美しいデザインの「加賀の紅茶」のラベル。丸谷焼のカップの絵柄は石川県らしさが感じられるルビーロマン

会員だより

「平成 25 年秋の叙勲」で、栄えある勲章を 7 名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。受章者のうち 6 名の方からご寄稿頂きました。

瑞宝中綬章

田畑 茂清 氏
(新潟市中央区在住)

元北陸地方建設局
河川部長



独り亡妻を想い、感謝した一日

この度の受章に際し、大変多くの先輩・知人・友人からお祝いの言葉を頂き、びっくりするやら恐縮するやらで、皆様方の御厚情に感謝いたしております。

瑞宝章は明治 21 年に制定され、公務等に長年にわたり従事し、成績を挙げた者に授与されるもので、古代の宝鏡を中心にデザインされ、大小 16 個の連珠を配し鈕に桐の花葉が付され裏面に勲功旌章（功績をあきらかにあらわすしるしという意味）と刻んであるものです。

叙勲は国家が特定の私人の榮譽を表彰することで、内閣の助言と承認に基づいて天皇の国事行為の一つとして授与が定められています。従って勲記には 3 寸（約 9.09 cm）の四方の国璽が捺されており

ます。これは第二次世界大戦後も変わらず、大日本国璽となっており皇位継承儀式において引き継がれる大事な国の印鑑なのだそうです。従って受章する者は、本人または関係する会社・法人等が刑罰等はもちろんのこと係争中の訴訟や不祥事の報道、国民感情から見て不相当と思われる者は授与から除外されることとなります。

ここまで述べた理由は、「私如き者によくもまあ授与されたなあ」という感謝の気持ちを表したかったからです。

11 月 8 日（金）、叙勲伝達式及び天皇陛下への拝謁式に出席することができました。事前に叙勲調査票が配布され、配偶者の出欠も届けるように求められていました。私には建設省及び財団理事長退官・退職後に再婚した老妻がおりますが、にべもなく「私は出席できません。この榮譽は亡くなった恭子さんとの功績ですよ」と言われ、独りで出掛けました。

会場は華やいだ雰囲気にあふれ、御夫婦での記念写真撮影等も、いかにも二人三脚で授与された証しだと判ります。そして天皇陛下拝謁の際には、わざわざ奥さま達のところへお廻りになり、御挨拶されるのですから、叙勲の半分は奥方へというのは明らかでした。

正直に申せば「亡くなった恭子と一緒にこの席にいたかったなあ、おまえに半分、いやそれ以上の功績があったらうな」。特に北陸地建時代（松本砂防、企画部専門官、技術管理課長、河川調査官、河川部長）には、亡妻恭子ともども公私にお世話になり、共に笑い合った時でしたから…。

受章そのものはうれしいでしたが、受章式典は悲しい気持ちを抑えることができませんでした。戦前、同僚を戦場で亡くして帰国、榮譽の勲章を頂いた軍人・兵士の気持ちを察すると、今の私と同じだったのでろうなと想う一日でした。

皆さん、北陸地方整備局で働いている後輩諸君、退職して今も奥様と相介けあって生活している先輩・同僚の方々、どうぞお元気で配偶者といっしょにすこやかに過ごしてください。ありがとうございました。

瑞宝中綬章

布施 洋一 氏
(横浜市旭区在住)

元北陸地方建設局
道路部長



故郷への思い

このたびの秋の叙勲で、受賞の栄に浴しました。これも長年にわたって皆さまからいただきましたご指導、ご支援、ご厚情のたまものと深く感謝申し上げます。

私の建設省における勤務は、昭和33年の中部地方建設局を振り出しとして、以来、本省、関東、北陸、近畿の各地方建設局など、平成元年までの31年間でした。このうち、故郷の北陸地方建設局に勤務したのは、昭和57年から58年にかけての1年余でした。

北陸地方建設局の道路部勤務と聞いたときには、子供の頃から雪の中で育ってきたから、雪にはびっくりすることはないと豪語して赴任しましたが、どういふ訳か、私の在任中の昭和58年という年は、希にみる少雪の年として、空振りというか、期待はずれというか、まったく肩すかしを食ったような感じでした。

それでも、雪氷、雪寒は、北陸地方建設局の最も重要な事業でしたから、この時期に管内の事務所を回らせていただきましたが、本当にほとんど雪がなく、現場の第一線の方々から逆に気の毒がられたり、

慰められたりしたことを今でもよく覚えています。こんなこと言うと、除雪でご苦労をされた方々には、叱られるかも知れませんが。

短い在任期間ではありましたが、多くの方々との出会いを通じて、数多くの思い出を作ることができました。中でも、国道289号の八十里越えの調査については、地元の方々に道なき道をご案内いただきながら、当時の新潟国道工事事務所の仲間たちと、2日ばかりで踏破したことが何よりも強烈な印象として残っています。また、国道353号の小岩峠のトンネルについては、私事で恐縮ですが、私の父方のルーツの地に係るプロジェクトとして、その起工にあたっては特段の感慨を味わさせていただきました。

毎日の勤めから解放されて約5年になりますが、故郷にまだ家がありますので、最近では小、中、高校の同窓会や同級会、伝統文化の催し、夏祭りや花火大会、展覧会や音楽会、等々の催しには、積極的に参加するように心がけておりました、今後も元気なかぎり、そうしたいと念じております。

余談になりますが、先日、故郷の家の近くに「Donald・Keen記念センター」がオープンしたと聞きまして、地元の文化協会の友人たちと訪ねてみました。すると、たまたまKeen先生ご本人がおられまして、お話をしたり、写真をご一緒したりしてまいりました。というようなこともあって、故郷への思いを一段と強めている昨今です。

最後に、北陸地域づくり協会の皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

瑞宝小綬章

田口 仁 氏
(千葉県我孫子市在住)

元北陸地方建設局
用地部長



感謝また感謝

このたびの秋の叙勲で、図らずも受章の栄に浴しました。去る11月8日に国土交通大臣から勲記・勲章の伝達を受け、その後皇居に参内して天皇陛下に拝謁の栄誉とお言葉を賜りました。当日は、天気も良く、素晴らしい式典で、日本人であることを改めて認識いたしました。

30年間の建設省勤務（先日、平成6年7月の退官時に受けた建設大臣からの感謝状が出てきました）の間、さまざまな勤務地でいろいろな仕事を経験させていただきました。

特に、北陸地方建設局では、2年余りではありましたが、皆様の支援により楽しく仕事をさせていただきました。心より感謝申し上げます。

今までは、建設省に勤務していたことも忘れるくらいに地域での生活を送ってまいりましたが、今回の叙勲により、建設省時代に多くの皆様のご指導、ご支援があつて、現在の自分があるとの思いを新たにしました次第です。

これからは、建設省OBとしての自覚と建設省及びその後の財団や民間企業の勤務の経験を地域での生活の中に生かしながら、毎日を送ってまいりたいと思っています。

瑞宝小綬章

小池 達男 氏

(埼玉県越谷市在住)

元北陸地方建設局
河川部長

近況ならびに北陸での思い出

このたびの秋の叙勲で、図らずも受章の栄に浴しました。古希を過ぎて3年目になります。年金生活も板につき怠惰に毎日を過ごしています。陶淵明の雑詩その5に「氣力ようやく衰損し、うたた覚ゆ、日々にしかざるを」という一節がありますが、まさにそのとおりです。体力、気力ともに減退し、平地を歩いていても時々つまづきますし、物忘れもひどくなってきています。

昭和41年に入省し、関東の利根川下流工事事務所を振り出しに関東に17年、東北に1年半、北陸に7年、国土庁に2年、水公団に2年、退官してからはリバーフロント整備センターに9年、日本建設コンサルタントとアイデアに8年というのが勤務実績です。

北陸では、河川計画課の時に「信濃川百年史」の発刊、信濃川百年事業の実施などがありました。これが35、6年前、大町ダムではコンクリート打設が完了し、みんなで祝杯をあげたこと、ダム周辺整備事業に取り組んだこと、籠川に架橋したことなどが思い出されます。

これがおよそ、30年前。河川部長の時は、NTTA型事業に関連して荒川の河川敷問題や宇奈月ダムサイト下流左岸の法面崩壊防止対策などがありました。

これだって22、3年前のことです。光陰は矢のごとく過ぎ去りますが、周囲の皆様のお陰で楽しく仕事ことができました。ありがたいことです。

今回の授章で一番うれしかったことは、女房が喜んでくれたことです。一人で出席のつもりでしたが、念のため尋ねましたら「私も行く」と申しましたのでびっくりしました。それからが大変でドレスをあつらえ、それに合う靴の、バックの、コートのと大騒ぎです。私は略礼服で良いだろうと思っていましたが、あまりにも女房が張り切っていますので、心配になり、モーニングをレンタルすることにしました。いずれも正解で、ほとんどの人がモーニングを着用し、奥様が同伴されていました。

芝のプリンスホテルで伝達式、皇居で陛下に拝謁し、夕刻4時頃散会となりました。東京駅のそばのビルの7階で魚の水炊きで祝杯を挙げました。良い思い出が一つできました。皆様本当にありがとうございました。

それでは、陶淵明の「神の釈」の一節を以てこの稿を終わりにします。これから私はこんな心境で過ごすことになろうかと思えます。

「大化の中に^{うち}縦^{しょうろう}狼^{らう}し、喜ばずまたおそれず、^{まさ}応に尽くべくんば、すなわちすべからず尽きしむべし、また独り多くおもんばかりこと無かれ」



瑞宝双光章

佐々木 重成 氏

(新潟市西区在住)

元北陸地方建設局
企画部 環境審査官



建設省人生の新たなスタート

—九死に一生を得た土石流体験—

11月8日秋の叙勲を受け、その後皇居にて天皇陛下に拝謁し、お言葉を頂戴しました。一連の行事はある種の緊張感の中進みましたが、その中に参加できたこと自体、自らの生涯の中で大きな誇りを感じました。この受章は私一人の榮譽ではなく、先輩や同輩の皆さんに支えられてのお陰と、心から感謝しております。

私は昭和40年に入省し、立山砂防、湯沢砂防、大川ダム、沖縄、四国地建の野村ダム、中筋川ダム、北陸地建の三国川ダム、そして水公団の長良川河口

堰等に従事してきました。そして在職28年の内北陸地建では16年間お世話になりました。思い出は全ての現場にありますが、北陸地建での思い出を少し書かせていただき受章の喜びとしたいと思います。

最初の思い出は立山砂防二年目の水谷出張所勤務のときであります。現場監督を終えた後、出張所長の岡さんと工事の状況確認のため多枝原谷に入りました。其の時、谷の水が急激に減っていくのを鮮明に覚えています。私達は危険を感じてすぐさま崖を駆け上りました。其の瞬間、谷は真っ黒な土石流で埋め尽くされました。この瞬間の判断と行動がなければ私の人生は終わっていたのであります。得がたい体験と建設省人生の新たなスタートになったと思いました。

二つ目の思い出は、私のダム人生のスタートになった大川ダムであります。47年4月から2年間は開発調査課長、49年4月から2年間は開発工務課長でした。基本計画の作成ではアロケの才朗といわれた河川部長の佐々木さんに厳しく指導された事を覚

えています。大川ダムの地質は当時日本一悪いといわれ、その悪さ等に対応する設計法（マット式重力ダム設計法）の開発に参加することが出来ました。又本体発注も手がける事が出来ました。発注の内容は本体掘削と、仮排水路トンネルでしたが、発注段階ではマット式重力ダム設計法による本体設計が出来ていなかった為、掘削図は従来の設計に基づき直営で作成する事になりました。直前に関東地建の川治ダムの入札が不調になった事もあり、心配しましたが、落札できてほっとした事を覚えています。

三つ目の思い出は三国川ダムであります。ここでは「家族的雰囲気のあるコミュニケーションのとれたダム一家」を作りたいと言うのが一つの望みであ

りました。従って人事や仕事の進め方には十分注意を払ったつもりであります。また、四国の二ダムと同様所内報を発行したり、所長杯ゴルフコンペを開催したり、「山遊会」をつくって巻機山に登った事もありました。そして定礎の夜の宴はそんな雰囲気を実感し得るものでした。

北陸地建の16年間、本当に思い出多き人生を歩ませていただきました。有難うございました。

今後は天皇陛下のお言葉「健康に気をつけ、国家・国民の為、精進するように」を胸に、一層精進していきたいと思っております。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

瑞宝双光章

村上 茂治氏

(富山県小矢部市在住)

元北陸地方建設局
道路部 道路調査官



感謝

あけましておめでとうございます。

このたび平成25年秋の叙勲で、瑞宝双光章を拝受の栄に浴し、身に余る光栄であり、これまで支えていただいた先輩・同僚をはじめ全ての皆様に心から感謝いたします。

思い返しますと、公共工事の施工方式が直営から請負方式に変わった昭和34年に北陸地方建設局高岡工事事務所に入所しました。直営工事に関わった土木や機械関係の技術者を中心に対応した「38豪雪」をはじめとした雪との戦いが、積雪寒冷地の道路交通の確保と新しい技術の開発に結びついていく時期に、直轄道路の計画・調査・維持管理を担当させていただきました。

能越自動車道を含む高規格幹線道路網の決定や歴史国道の選定、電線類の地中化等、貴重な経験やさまざまな勉強もいたしました。

近畿地方建設局や本州四国連絡橋公団にも勤務させていただき、都市・地域に関わる計画や地域間を連絡する大規模事業等にも関わらせていただきました。

将来の速度サービスUPに対応できる山岳道路の路線計画、大都市圏や地方都市圏のパーソントリップ調査、長大橋梁の検査用通路に資材運搬車両の走行を考慮、強風による吊り橋の揺れの大きさなど本州四国連絡道路の維持管理は、そこにいたからできた経験です。

さて、50年以上昔になりますが、建設省に入所当時の国道は砂利道であり担当した舗装工事で「ようやく仏壇の中に埃が入らなくなり、戸を開けておけます」と感謝された沿道のおばあさんの言葉は、今も忘れず心に残っています。

「俺が来たのにこの道路の悪さはなんだ！」

これは国道17号の整備に関わっていた時に当時の建設大臣から励まされた時の言葉です。

「大阪は屋根ばかりだね」

これは幼稚園児だった長男が赴任の移動中に発した言葉です。

「ゼロ回答はだめだから必ず有額回答を願いたい」

これは道路管理手続きで、申請者の手続きの簡素化をお願いした時の気持ちです。

現在は、自治会や公民館の活動をはじめ、地域のさまざまな活動に関わっていますが、入省当時に経験した「感謝」の気持ちは心の中にしっかり根付いており、日頃の対応に生かしています。

勲章を機に心を新たにして「地域のため」に精進したいと考えていますので、これからもよろしくお願いいたします。

瑞宝中綬章

森本 裕士氏

(神奈川県横浜市在住)

元北陸地方建設局
道路部 道路計画課 調査係長

7名の方の官職は北陸地方建設局在職時のものです。

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共済、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
平成 25 年度 「防災ボランティア 週間」防災講演会	1月20日(月) 15:00～17:10	富山国際会議場 大手フォーラム 2F 多目的会議室 定員 150 名	講演① 「国土交通省の防災対策への取組」 氏家 清彦 氏 (北陸地方整備局 富山河川国道事務所長) 講演② 「近年の気象現象と災害発生傾向」 奥 清次 氏 (富山地方気象台 次長)	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160
土木遺産保存活用 シンポジウム	1月17日(金) 13:00～16:30	長野県立歴史館 (千曲市屋代 260-6)	①基調講演 「土木遺産の活用とまちづくり」 佐々木 葉 氏(早稲田大学教授) ②土木遺産の保存、修繕、活用事例	土木・環境しなの 技術支援センター 事務局 TEL:026-292-4382
第 9 回 社会資本整備 セミナー	2月14日(金) 13:30～16:00	新潟県建設会館 定員 200 名	講演① 「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 北陸地方整備局 担当官 講演② 「雪利用の取り組みと将来展望 ～雪氷冷熱エネルギーの可能性～」 伊藤 親臣 氏 (公益財団法人 雪だるま財団 チーフスノーマン)	社会資本整備 セミナー事務局 (北陸地域づくり協会 技術部) TEL:025-381-1882
	2月18日(火) 13:00～15:30	長野バスターミナ ル会館 定員 80 名		
	2月20日(木) 13:30～16:00	ボルファート とやま 定員 100 名		
	2月21日(金) 9:30～12:00	石川県地場産業 振興センター 定員 100 名		
南砺・そば祭り	2月7日(金) ～2月9日(日)	利賀国際キャンプ 場周辺(南砺市利賀 村上百瀬)	利賀特産そば粉を使用した手打ち そばや岩魚の塩焼き、五平餅などを 味わい、伝統行事「丑曳き」、民謡、 雪夜の花火ショーなどが楽しめる。	南砺利賀そば祭り実行 委員会(南砺市利賀行 政センター) TEL:0763-68-2111
「北陸地域の活性 化」に関する研究 助成事業報告会	3月18日(火) 14:00～17:20	チサンホテル新潟 (新潟駅南口直結) 定員 120 名	第 18 回「北陸地域の活性化」に 関する研究助成事業、12 課題の成 果報告	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160

編集後記

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。
「この地域が好きだから守り継ぎたい」。中山間地から「移住
女子」がメッセージを発信しています。
町のルーツだった鉄道の廃線レールを利用し新しい乗り物で人
を呼び込み、地域の魅力を伝えようと活動しているNPOがあります。
行政が企画した工事用道路を走り新しい道路建設の意義を
知ってもらう体感バスには、かつてあった交流を復活させ地域を
活性化させたいと期待する人々の応募が殺到し大盛況でした。
今年も地域を元気にしようとして活動している人たちを紹介していきた
いと思います。(事務局)

地域づくり in ほくりく 第3号

発行 平成26年1月1日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>